

2019年度しあわせ研究

死を考慮したしあわせ学

主任 一ノ瀬正樹



幸福論は長い歴史を有する思想や文学のジャンルである。私の専攻する哲学でも、アランやラッセルの幸福論など、長く読み継がれ、今日の Well-being 論の基盤をなしているものが多い。けれども、概して言えば、幸福論というのは、どのような生活態度や心構え、あるいは考え方をすれば、各人の人生が幸福で充実したものになるか、といういわば人生途上視点に立って論じられるものがほとんどであったと言える。しかし、果たしてそれで「幸福」や「しあわせ」を論じ尽くすことができるのだろうか。私たちの人生は、明確な意識も記憶もない茫漠とした誕生時から始まって、人生途上を通過して、そして最後には「死」を迎え再び意識も記憶も定かでなくなる。いや、山本常朝『葉隠』の「常住死身」の思想、そして西洋の "memento mori" (死を銘記せよ) の格言などを想起するならば、私たちの人生はとどのつまり「死」へと焦点し、「死」へと収斂していく、そういうものなのではないだろうか。"mortal" (死すべき者) という言葉は、まことに言い得て妙である。そうならば、「しあわせ」や「幸福」が私たちの人生の理想・目的だと捉えられる以上、そして私たちの人生はいつも「死」と隣り合わせであり、いわばつねに「死」を背負っているようなものである以上、「しあわせ」を論じたり「幸福」を探求したりすることは、いわば定義的に、「死」の問題へと真正面から対峙することにほかな

らないのではないか。

こうした見地から「しあわせ」について考えていくプロジェクトが「死を考慮したしあわせ学」(the death-considered theory of happiness, DCTH)である。このように述べると、いわゆる「終活」を想起する方がいるかもしれない。DCTH は、確かにそのような実際的な効果に無縁ではなく、終局的には人々の実生活に還元できるような研究たらしめているが、その前に、もっと根源的に、「死」とは何か、「死すべき者」にとっての「しあわせ」とは何か、ということ学問的に掘り下げることが志向している。一般に、「死」は「しあわせ」の対極、死んでしまうことは不幸なことと捉えられがちだが、果たして本当にそうなのか。ソクラテス-プラトンが言及する「ハデス」(死者の国)の概念、浄土真宗の「浄土思想」など、人類の文化の中には「死」を積極的に意味づける思想が脈々と流れている。あるいは、「安楽死」の概念の裏面には、死は苦しみからの解放である、といった考え方が見て取れる。また、身近な人が亡くなったときに残された者が抱く「グリーフ」は、それが長期に続く場合は治療の対象となりうるが、「グリーフ」の感情自体は自然なものであり、かえってそのことで亡くなった方との深いつながりを確認することにもなりうる。そうしたつながりを改めて痛切に抱くことは、悲しい気づきではあっても、ある種の究極の「しあわせ」のカタチなのではないか。そしてさらに、こうした確認の果てには、死者は本当に非存在なのだろうか、という哲学的な問いも生まれてくる。DCTH は、これらの深く真摯な問いに立ち向かう、アカデミックな挑戦なのである。